

編集後記

『社会と倫理』第29号では、「本質的自然資本 (Critical Natural Capital) 概念の可能性と課題」と題する特集を企画した。本特集は、経済学と倫理学を学問的背景とする4名の研究者が、本質的自然資本という不可思議な概念を一体どう考えたら良いのか、という問いに真摯に向き合い、思索を重ねた成果が束ねられたものである。各論文をお読み頂ければ、4名それぞれの知的格闘のプロセスを垣間見ることができると思う。

思えば今回の企画は、色々な意味で野心的なものだった。まず、本質的自然資本 (CNC) という日本ではほとんど馴染みのない概念に焦点を当てたことである。特集の緒言でも述べられている通り、CNCという概念は「世代を超えて維持すべき自然環境・資源とは何か」という問いを与える魅力的な概念であるが、同時に多くの解明すべき課題を含んでいる。とりわけ、環境経済学の中の議論では、CNCを積極的に用いる論者間で指示する内容が異なっていたり、「〇〇はCNCである」という前提から議論を始めたりするケースが散見される。そのことがCNCの一種の“インフレ”状態をもたらし、概念自体の価値を貶める結果につながっている。このような編者の問題意識から出発した本特集であるが、各論考を読んでも、経済学と倫理学の交錯する領域にこそCNC概念が位置しているという思いを強めることとなった。もしかすると、そのことが、CNC概念が経済学の中で異端視される要因だったのかもしれない。本特集で得られた知見の詳細については、緒言と各論考を参照して頂きたいが、CNC概念を理論と実践の両面で精緻化・具体化していく際の出発点を明確に提示できたと自負している。論文特集の企画「初心者」であった企画責任者(籠橋)の手探りの編集方針に全面的に協力して下さった執筆者の方々に、改めて御礼を申し上げます。

論説では、政治学、哲学を専門とする気鋭の若手研究者3名の論考を掲載した。それぞれの論考が取り扱っているテーマは、民主主義が究極的に直面する規範的な決定不能性の問題(山本圭氏)、戦争責任をめぐる戦間期のドイツ外交史における

価値観の役割(北村厚氏)、差別の害悪の判断をめぐる規範理論の理路の整理と吟味(堀田義太郎氏)となっており、本誌に相応しい内容と高い質を兼ね備えた論考を収めることができたと思う。さらに、3つの論考は、扱うテーマこそ違えども、「ある社会の中で弱い立場に置かれた主体を、その社会自身がどのように扱うべきか」という共通の問いを発している点で、きわめて興味深い。日本で深刻さを増しつつあるヘイトスピーチなどの差別問題は言うに及ばず、世界中で起きているマイノリティをめぐる社会問題は、我々の社会に不気味な影を落としている。そうした問題を考え抜くための重要な手がかりを、上記の諸論考は提供してくれている。

社会倫理の資料では、千知岩正継氏の手によって、「人道的介入」と「保護する責任」に関連する重要文献の包括的な目録が蒐集されている。これらの文献は全て日本語で読める内容となっているため、上記のテーマに関心を持つ読者はもちろん、これから研究を始めようとする学部生・大学院生には格好の手引きとなるだろう。分野を異にする研究者にとっても、論点が網羅的に整理されたリーディングリストを手にすることは、非常に価値が高いと思われる。

本誌の後半には、13本の書評と6本の新刊紹介が収録されている。書評で取り上げた文献は倫理学、哲学、政治学、農学と多岐にわたっているが、いずれの書評も著者に対する批判的応答が繰り返され、非常に読み応えのある内容となっている。内容の質の高さはさることながら、評者の方々の知に対する真摯な姿勢に学ぶところが多かった。社会倫理研究所の所員の手による新刊紹介のコーナーでは、社会倫理に関する文献が紹介されている。今年は6本の収録となったが、読者の関心を引く文献があれば、ぜひ原書を手にとってお読み頂きたい。

『社会と倫理』は次号が30号と節目の年を迎えるが、年を経るにつれ、社会倫理を考えることの重要性は増している。混迷をきわめる現代社会の一片の良心を担う媒体として、今後も良質な公共空間を創出し続けていきたいと考えている。

籠橋一輝、奥田太郎